

ジャン・バニエに聞く¹ 共に生かされながら

(翻訳＝浅野幸治)

リディア・タルボット バニエさんは、ほとんどの人には決してできないようなことをなさっています。つまり、貧しい人たち、具体的には障害者、それも知的障害者の人たちに仕えることに人生を捧げてられました。ご自分の信仰を実践されているわけです。そうすると、そのような生き方はどこで学ばれたのでしょうか。

ジャン・バニエ 基本的には、トマ・フィリップ神父からだと思います。私の経験では、このような生き方には、喜びがいっぱいあります。反対に、人々にとっていわゆる「正常」であることはとても難しいことだと思ふことがあります。今の世の中はすごく張りつめた世界ですから。ラファエルとフィリップ——私が一緒に暮らした最初の二人です——と一緒にあって、私は自分自身を見つけはじめました。自分のなかの子供に気付くようになったのです。私は、小さな家で彼ら二人と一緒に家事や庭仕事をして、一緒に遊んで、一緒にお祈りをして、ごく簡素に暮らしていたときほど幸せだったことはありませんでした。つまり私は、そのとき自分の人生にまったく新しい意味を見いだしたのです——それは、海軍にいたときとも非常に違うし、哲学を教えていたときとも非常に違うけれども、なにかずっと心を満たしてくれるものでした。そこにイエスがおられることがまったく明らかだったからです。

タルボット 自分自身を見つけられたわけですね。でもその発見には、つまり自分の中の問題点に気付き、自分の教会の歴史や現状にも問題点を認めるようになるには長い時間がかかったと、バニエさんはご著書『人間になる』の中で述べられています²。その点についてお話しいただけますか。

バニエ 分かっていたでしょうが、私たちはみな他人とかかわりあう能力という点で大きな問題があると、私は思うのです。人間は権力が好きで、他人から賞

賛される優秀な人間であろうとします。しかし、知的障害のある人たちと一緒に暮らしはじめると、自分自身について実に多くのことが分かるようになります。知的障害のある人たちのなかには、つきあい易い人もいますが、すごくイライラさせられるような人もいます。自分の中の問題点、自分自身の乏しさや暴力性などに気付かせてくれるような人もいます。私自身、自分の中に驚くべき暴力性を感じた経験が何度もあります。おそらく他の人たちが周りにいてくれたおかげで、私は誰も傷つけませんでした。自分がどのような人間かが分かりました。また、真理によって自由になれるということにも気付きました——そして、人間であるとはどういうことかが少しずつ分かってきたのです。人間であることの本質は愛する力であり、私たちが他人に生きる力を与えることができるという驚くべき現実です——私たちは、思いやりや愛によって他人を生まれ変わらせることができますし、相手の人に助けられて私たちも生まれ変わることができます。それは、お互いに生きる力を与え合うということですが、自分たちがどれほど不完全かに気付くことでもあります。

タルボット 不完全で、孤独なわけですね。バニエさんは、『人間になる』の初めのところで、孤独について非常に詳しく論じて、知的障害をもった人たちが「死のような孤独」のなかであげる、根源的な叫びについて書かれています。そのような孤独を感じられたことはありますか。

バニエ 私の場合、気がついたときには、自分の孤独を覆い隠すようになっていました。

タルボット では、バニエさんの孤独は、どういうものだったのでしょうか。

バニエ 根本的に私たちはみな孤独なのですが、それを覆い隠していると思うのです。私は不安におびえたことがありますし、誰でもそういう経験をすると思います。不安とは、心の落ち着かなさです。睡眠に影響したりします。私の考えでは、私たちはその不安に気付く必要があります。というのは、不安は、神ではない私たち人間の現実だからです。私たちには、あらゆる力があるわけではありません。必

要なものすべてがあるわけでもありません。私たちは死すべき人間であり、したがって誰でも肉体的に崩壊していく運命にあるのです。しかし私たちは、死ぬことを非常に恐れます。私たちは不安におびえます——だからそれを覆い隠すのです。そうして、夢の世界に入っていったり、仕事の世界に入っていきます。仕事中毒になるのです。それは、現実に触れるのが怖いからです。

ですから私も、不安におびえたことはたくさんあります。それはこういう意味だと思います——つまり、私たち人間は、不安を手放さないで、しかも薬物やお酒や安易な性行為に溺れたり、仕事の世界に逃げ込んだりするのではなくて、人とかかわりあって生きること、このことが求められていると思うのです。知的障害のある人たちと一緒に暮らしたとき、私は彼らにすごく助けられて、自分の身体性に気づき、それを受け入れることができるようになったと思います。例えば、知的障害のある人たちのとてもいいところは、彼らに出会うと、彼らはずっとやってきて両腕で包んでくれるということです。

タルボット 楽しそうですね。

バニエ その通りです——知的障害のある人たちにとって人とのかかわりあいとは、経済や神学や政治について議論することではありませんから。

タルボット それは一方通行ではなくて……

バニエ 相互通行です。

タルボット しかし、最初からそうだったわけではありませんね。バニエさんは、第二次世界大戦中、十三歳のときに海軍に入って、青少年期はずっと軍隊で過ごされました。そのころの自分は義務と規律に忠実な、張り詰めた人間だったとバニエさんは書いておられます³。そうすると、どういう大回心があって、今の道を歩まれるようになったのでしょうか。

バニエ 海軍を辞めたのは、徐々に気持ちが変わって、愛を求めるようになったから——戦争や軍備以上のなにかがあると思うようになって、少しずつ（海軍から）気持ちが離れていったからです。一九五〇年のことですが、私は若い海軍士官で、

私が乗っていた航空母艦がハバナに行きました。それはフィデル・カストロが未だいないときで、仲間の士官たちは皆、ダンスに出かけました。しかし私はと言えば、無我夢中で教会に行きました——私は、なにか別のもの、つまり自分の人生のために新しい意味を探し求めていたからです。ですから、それは突然の大回心といったものではありません。徐々に、単なる戦争準備とか機械や効率、能力や命令よりも、もっと深いなにかがあると思うようになったのです。なにか別のものです——自分自身にも関わるものだったと思います。おそらくそれは、自分自身に立ち返りたい、そして自分自身の中で一番大事な部分、つまり自分の本心を見つけ出したいという欲求だったのでしょう。

タルボット それからバニエさんはフランスで哲学を勉強されて、叙階される前に哲学の先生になりました。

バニエ 私は叙階されていません。

タルボット そうでした。ですが、信仰する者がみな司祭だという意味では司祭ではないですか。

バニエ なるほど。

タルボット しかもそれだけではなくて、バニエさんは、知的障害者と共に生きるというラルシュの生き方に人生を捧げてこられました。

バニエ ええ、そうです。

タルボット ですからその意味では、誓願されているわけです。

バニエ ええ。私たちには心の結びつきがあります。知的障害をもった人たちは彼らの人生を私に捧げてくれたと思います。私も自分の人生を彼らに捧げました。そうして私たちは一緒になって、なにかを得たのです。（人が何事かをするのは、それが本当に自分を満たしてくれそうな場合に限られます。）実際、私は、ラルシュで暮らしたおかげで——そして信仰と光と共に生きたおかげで——自分が満たされた気がします。

タルボット バニエさんだけではなくて、他の人たちも満たされています。世界中

に百以上ものラルシュの家があるのです——ここアメリカ合衆国にも十三あります。バニエさんのご著書『人間になる』の中心には、「ルカによる福音書」特にその中のイエスのたとえ話——金持ちとその門前の乞食ラザロについての話⁴です——についての透徹した理解があるように思います。その理解は、バニエさんの生き方にとってどういう意味をもったのでしょうか。

バニエ 「ルカ福音書」の中には大変な秘義が隠されていると思います。ラザロは、できものだらけで社会からのけ者にされた乞食でした——その彼が天国に行くのです。金持ちは、ラザロを認めることができず、ラザロを拒絶しました。この金持ちは「苦しい場所」に行きます。残念なことに、金持ちの人たちは、怖くなって、心の壁、防衛機制を築いてしまいます——自分の財産を守り、自分の地位を守り、自分の権力を守る必要があるからです。ですから、金持ちの人たちは恐れてばかりいることになりましたが、ラザロはなにも防衛しなければならないものはありません。ラザロはラザロ、ただそれだけなのです。

タルボット ですが、本当の罪は決して富そのものではなくて、裕福な人たちが貧しい人たちを見ようとしない、目を閉ざすということでした。

バニエ そして貧しい人たちに目を閉ざすなら、神様に目を閉ざすことになります。これが秘義です——言葉は肉となり、小さい者となり、十字架にかけられたからです。この秘義によれば、神様は、貧しい人たちや弱い人たち、無力な人たちの内に隠れておられます——ですから私たちが弱い人たちにしたこと、飢えている人たちや渴いている人たちにしたことはすべて、イエスにしたことなのです。イエスにはこういう驚くべき言葉があります——「このような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである⁵。」

タルボット それはつまり、私たちに共通の人間性を理解するということですね。では、どのようにしたら、そういう理解を得ることができるのでしょうか。

バニエ 経験を通してだと思います。私たち人間にとってやっかいな事実、自分たちが傷つきやすいということです。私たちはみな傷ついていて、だから防衛機制

を作り上げるのです。この防衛機制は、恐れと偏見の上に成り立っています。誰でも「自分が一番だ」と言わないではいられないのです。曰く、自分たちはカナダ人だ。曰く、自分たちはアメリカ人だ。自分たちはなにがしだ、かがしだ。あるいは自分たちはこの教会の人間だ。自分たちはなんでも知っていて、他の連中は知らない、というわけです。そうしたある日、ラザロに出会います。そしてラザロと話をすると、彼が実に美しい人間であることが分かってくるのです。

これは、ある小さな男の子についての話です。ラザロとは非常に違っていますが、その子は五歳で亡くなりました。三歳のときに両足が麻痺して、麻痺がだんだんと身体に広がっていきました。死の数週間前、その子は視力も失い、全身が麻痺していました——かたわらでは母親が涙を流していました。小さな男の子は、「お母ちゃん、泣かないで。僕にはまだ、心があるよ——お母ちゃんのこと、大好きだよ」と言いました。その男の子は驚くほど成熟していたと思うのです。というのも、成熟とは、ないものを欲しがって泣くことではなくて、あるものに感謝することだからです。

できものだらけの乞食ラザロの傷ついた身体の中には、自らの人間性を自覚した人間がいます。反対に他の多くの人たち、お金も力もある人たちは、自分の人間性を隠しています。彼らは、自分が誰であるかを本当には知らないのです。自分が愛を求めて叫ぶ幼子であることを知らないからです。アリストテレスは、こういう洞察に富んだ言葉を述べています。「自分が愛されていないと感じた人は、人々から賞賛されようとする。」つまり、優秀な人間であろうと欲し、権力を求め、人々から注目されたいがります——しかし、自分が本当には誰であるかをよくは知らないのです。

タルボット それから恐れですが、恐れについても『人間になる』の中で書かれています。優しさには恐れがないとのことですが⁶。

バニエ 優しさには驚異的なところがあります。今の世の中で優しさ (tenderness) と言えば、つい性愛的な連想が働いてしまいます。優しさとは何で

あるかがよく分かっていないからです。優しさとは、例えば、母親が子供を抱いて安心させてやり、その抱き方を通して子供にその子の美しさやかけがえのなさを伝えることです。また、看護師が患者さんの包帯を外すときに、痛くないようにそつと外すことです。ですから、優しさとは、人を傷つけないということなのです。

「イザヤ書」では、主の僕は傷ついた葦を折らないということが言われています⁷。人を優しく抱くというのは、その人の尊さや大切さや価値をその人に伝えることなのです。

いいですか、私たちの世界には、非常に傷ついた人たちがたくさんいます。現代のラザロがたくさんいるのです。その人たちはひょっとしたら実業家として成功しているかもしれませんが、彼らの内には「ラザロ」がいます。彼らは恐れ、怒り、競争していますが、自分が誰であるかをよく分かっていません。彼らの内には汚れた部分がたくさんあって、彼らも優しく抱かれる必要、耳を傾けてもらう必要があります。要するに私は、すべての人が傷ついていると思うのです。孤独な人たちもたくさんいます。例えば、結婚生活の破綻に苦しみながら生きています。彼らにも優しさが必要です。それはどこかで誰かが「何々さんがいてくれて良かった。大切な人なんですから。本当に大変でしたね」と言ってくれることなのです。

タルボット 孤独から人とのつながりへ、排除から受け入れへということに関連して、バニエさんは自由への道、それからその七つの段階について述べられています⁸。それについて少し話していただけませんか。

バニエ ええ。まず第一に、自由になりたいと思うためには、私たちは、自分が自由でないこと、権力への衝動に囚われていること、さらに自分の人格の根本に恐れがあること、自分が恐ろしい偏見をもっていることに気付く必要があります。ですからまず最初に必要なものは、自分が自由でない、人々の目に縛られているという意識です。というのも私たちは、他の人たちが望むような人間になりたいと思ってしまうからです。ですから、これが始まりです。そして自分自身を理解できたなら、自由になりたいという気持ちが起こります——それは、私たちが、自由な人に

出会ったときです。あるいはひよっとしたら、祈っているときかもしれませんし、自然を見ているときかもしれません。自分の中でなにかが湧き起こるのですが、その自由への道を歩いていくのには助けが要ります。自分と共に歩いてくれる人が必要です。

タルボット　そして、知的障害者たちが、自由な人であり、私たちを導いてくれることが多いと言われるわけですね。

バニエ　知的障害をもった人たちが素晴らしいのは、常識に縛られていないからです。私たちが大勢でローマに行ったときのことで、私たちは教皇に謁見するため、教皇の来室を待っていました。そのとき、かなり重い障害があるのですが歩くことはできるファビオが、教皇の椅子に座りました。ファビオはそこに座って、とても嬉しそうにしている、他の私たちはみな、どうなることだろうかと心配していました。しかし、ファビオは自由でした。私だったなら、ファビオと違って、絶対にそんなふうに教皇の椅子に座ったりしなかったでしょう——私たちは「他の人たちは自分のことをどう思うだろうか」という心配に囚われているからです。しかし知的障害をもった人たちは、そういうことを心配しません。彼らが心配するのは、「僕のこと、好き？」ということなのです。ですから、知的障害をもった人たちは、なにか別のものに捕らえられているわけですから——それは、彼らの存在の一番深いところからやってくるなにかです。彼らは人々に、信頼するように呼びかけ、自分自身も他人を信頼します——そうして私たちみなに、お互いに信頼し合える関係になろうと呼びかけているのです。

タルボット　そして慈しみ合おうということですね。教皇ヨハネ・パウロは、ラルシュの活動を、愛の文明の力強く幸いなしるしと呼びました。実際に、バニエさんは世界を一人ずつ変えておられると思います。今日は本当にありがとうございました。

訳注

1 本稿は、二〇〇二年二月二四日にシカゴのテレビ局 WTTW 11 の「30 Good

Minutes」という番組で放映された「Interview with Jean Vanier」を訳したものです。

- 2 ジャン・バニエ（浅野幸治訳）『人間になる』新教出版社、二〇〇五年、一七二頁。
- 3 同書、一二二頁。
- 4 ルカによる福音書一六章一九～二六節
- 5 マルコによる福音書九章三七節
- 6 バニエ、前掲書、一三六頁。
- 7 イザヤ書四二章三節
- 8 バニエ、前掲書、一六八～一八二頁。

（あさの・こうじ 豊田工業大学助教授）

（付記 本翻訳は新教出版社『福音と世界』2007年1月号、56～61頁で発表したものである。）